
とある科学と仮面奏者

2Pカラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学と仮面奏者

【Nコード】

N3453T

【作者名】

2Pカラー

【あらすじ】

一人の超能力者を絶対能力者へと押し上げるための『絶対能力進化実験』。その第9982次実験に一人の異分子が紛れ込む。※本作の主人公はP3Pの女主人公です。P3P未プレイの方はネタバレにご注意ください。また、十分に楽しめないおそれがありますが、ご了承ください ※本作はあくまで素人が趣味と思い付きと悪ふざけで書いているだけの二次創作です。過度な期待はしないでください

01. とある科学と仮面奏者（前書き）

ほんさくはしりあすのれんしゅうなんだよ

しゅじんこうはP3Pのおんなしゅじんこうなんだよ

べるそなをふれいしてないひとにはちんぷんかんぷんかも！
ごめんね！

01. とある科学と仮面奏者

それは、本当に偶然の出会いだった。

なんとなく散歩していたところ、じーっと一点を見上げ続ける少女に出会った。

微動だにせず何かを見つめる少女。ゴーグルを頭にかけたその子の表情が、まだ感情を手に入れる前の『あの子』に似ていた気がして、

だからなのだろうか。気づけば私はイヤホンを外し、その子に声をかけてみたのだった。

「ねえ。さっきから何をしているの？」

それが、運命を変える行動だとも気づかずに。

「ミャー」

——とある科学と仮面奏者——
ペルソナつかい

彼女にとって少女の返答は理解の追いつかないことだった。それも当然だろう。『何をしているのか』に対して『ミャー』という返答はとても適切なものとは思えない。

いや、あるいはそれは昨今の中学生——少女は夏休み真っ盛りの八月十五日という時間軸にいるにも拘らず、きっちり常盤台中学の制服を着ていた——の間での流行なのかもしれない。であるならば退くわけにはいかないだろう（なんというかジェネレーションギャップという言葉が嫌いな彼女だった。そりゃ高校三年生は中学生にとって見ればオバ……世代の違う存在かもしれないが）と、彼女は奇妙なやる気に満ちる。ゆえに彼女は拳を握り親指だけを出すと、

「みゃー!!」

強くそれを突きだしていた。

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「ミャーとなく四足歩行生物がピンチです。とミサカは突然奇声を発した女性にあえて触れないであげるといふ優しさを発揮します」

「触れてよ! その優しさが痛いよ!」

涙声になりながら彼女は少女——ミサカというらしい——に縋り付く。初対面の相手に気安すぎたか? と一瞬思ったが、振りほどかれないということは平気なのかと、彼女は頭に浮かんだ懸念のみを振りほどいた。

(っっていうかミサカ？ 常盤台のミサカちゃんということは超電磁^{レール}砲^{ガン}？ 噂に聞いてた電撃姫とはずいぶんイメージが違うけど)

「……ま、いっか。こういう時はアレね。『どうでもいい』」

「『どうでもいい』ですか。とミサカはあの小さな四足歩行生物が地面に叩きつけられる危地にあるというのに一顧だにしない年上の女性の冷酷さを恐怖とともに認識します」

「あ、そういうことじゃなくてね」

と言って彼女はミサカから離れる。

それにしても木に登って降りれなくなった子猫とは。なんとベタな。ミサカの代わりに助けてあげて好感度アップを狙えと言う製作者の意図が伺えるというものだ。帽子と顎髭がトレードマークのかつての親友が好きそうなベタさである。無論、この世界に製作者^{かまろー}と言う名のシナリオライターが存在するならば、の話ではあるが。

と、彼女がミサカとともにプルプル震える子猫を見上げていると、ミサカは空中に指を走らせて絵を描き始めた。

「このような体勢をとればギリギリ届くのではないでしょうか。とミサカは提案します」

ミサカの描いた絵は四つん這いになった人の上に人が乗るというもの。周囲に台になるようなものはないし、子猫のいる木は枝も細く登れそうにない。至極まっとうな提案にも思えたが、

「ふっふっふ。その必要は無いよ、ミサカちゃん」

彼女はチッチと指を振ると、コテンと可愛らしく首を傾げたミサカの前でポケットを漁り始めた。

そして取り出したのは小さなビニールパック。

「いったいそれはなんでしょうか？ とミサカはアナタの手にある物を伺います」

「ふふん。こんなこともあろうかと用意していたのだよ。これさえあればプルプル震える子猫ちゃんもイチコロだぜ」

「……粉入りのパックを片手にそのセリフはやバすぎるだろ。とミサカは警備員アンチスキルを呼ぶべきかどうか逡巡します」

「……ミサカちゃんは私に毒舌過ぎないかな？」

口は尖らせつつ、なにはともあれと彼女はパックを少しだけ開けると、差し込んだ人差し指に粉を少量こすり付ける。人差し指に付着した粉を伸ばすように、親指の腹と擦り合せれば、

「？ 何をしているのでしょうか。とミサカはアナタの真意を尋ね——ッ!？」

それはミサカにとっては予想外のことだった。

彼女が粉をつけた指を子猫に向けて伸ばしたところ、それまで枝の上で縮こまっていた子猫が飛び降りてきたのだ。彼女の胸に向かつて。

「ふははー。まさしく計・画・通・り！ 子猫ちゃんにマタタビは刺激が強すぎたみたいじゃん」

難なくそれを抱き留めた彼女の腕の中では、子猫がゴロゴロと喉を鳴らしていた。子猫の喉を指で優しく撫でる彼女の姿は微笑ましいワンカットではあったが、

「ずっと心配していたのはミサカの方だったというのに。とミサカは美味しいところだけを持って行った泥棒猫をジト目で睨みつけます」

「ふふん。ねえどんな気持ち？　どんな気持ち……って嘘嘘！　ミサカちゃんにも撫でさせてあげるからそんな目で見ないでよ」

「そ、そうですか。ならば許してあげましょう。とミサカは差し出された子猫の愛らしさにドキドキしながら上の空で返答します」

上の空で、って。ミサカの言動を彼女は可笑しく思いながらも腕の中の子猫にミサカが触れやすいように持ち上げる。

と、それまでマタタビによって酩酊状態になっていた子猫が、ミサカが指を近づけた瞬間スルリと腕の中から抜け出した。

そして子猫は傍にあった植え込みへと駆けこんで行ってしまった。

耐えるにはつらすぎる空気だった。沈黙が耳に痛く、彼女は両手をついて落ち込んでしまったミサカに恐る恐る声をかけた。

「……えーっと」

「……ミサカはずっと心配していたのに。心配していたのはミサカの方だったのに。とミサカは一度も触らせてもらえなかったことを嘆きます。もしかしてミサカからは変な匂いでもしているのでしょうか。とミサカはさらに落ち込みながら嘆き続けます」

「あ、あれじゃないかな？ エレクトロマスター 電撃使いって体から微弱な電磁波が出てるとか？ ちょっと怖がっちゃただけでミサカちゃんが嫌いつてわけじゃないと思うよ？」

「確かにその可能性はありますね。とミサカはアナタの励ましの言葉がなんの意味もないことをあえて言及せずに首肯します」

いや、思いつきり言及してるから。彼女は苦笑しながらも落ち込んでしまったミサカの手を取って立ち上がらせた。

「……そういえば、ミサカはミサカがエレクトロマスター電撃使いであることをアナタに伝えていましたか？ とミサカは不意に訪れた疑問を口にします」

「え？ ああ。だって有名じゃない。常盤台のレベル5。レールガン超電磁砲の御坂美琴ちゃんでしょ？」

「ああ、なるほど。とミサカはアナタの言葉に納得するとともに自分分は『お姉さま』とは違うと認識を改めることを要請します」

「『お姉さま』？ ということはミサカちゃんは超電磁砲ちゃんの妹ちゃん？」

「はい。ミサカは妹達の一人に当たります。詳しくは聞かないで頂けるとありがたいのですが。とミサカは複雑な事情があるように仄めかし、アナタの良心に期待します」

「ふふっ。ならご期待に応えましょう。詳しくは聞かないよ。それはそうと間違えちゃったことは謝らせて——ッ!？」

そこで彼女は言葉を止めると、一瞬眉を顰めた。

ミサカが首を傾げてはいたが、彼女は自分の見せた表情の変化の理由については言及せず、少しかり笑みを深めるだけ。

その視線は、それまでの彼女の物とは違い、どこかミサカを探るように変わっていた。

「へえ。こんなところで二人目に会えるとはね。それにしても、『戦車』のアルカナかあ」

「いきなりどうしたのですか？　とミサカは雰囲気が変わったアナタに問いかけます」

しかし彼女はミサカの問いかけに対して『なんでもないよ』と笑うだけ。

そしてなおも首を傾げるミサカの腕をとると、引っ張って歩き出した。

「いきなりどうしたのですか？　とミサカは先ほどと全く同じ問いに違う意味を持たせて尋ねます」

「んー？　そうね。報酬が欲しくなった、ってどこかな？」

「報酬ですか？　とミサカは要領を得ない返答だなど内心馬鹿にしながら聞き返します」

「内心でも馬鹿にしないでよ。で、報酬ってのはね。ほら、子猫を助けてあげたでしょ？　それに対するお礼が欲しいなあって」

「それに対するお礼を求めるならば助けた対象である子猫に求めるのが妥当なのではないのですか？　とミサカは不躰なことを言い出したアナタに呆れながら答えます」

「それは無茶つてもものでしょ。お礼といっても、高い物を買ってだとかは言わないから安心してよ。ちょっと付き合ってもらいたいってだけだから」

そう言っ て彼女はミサカの腕に自分の腕をからませる。

年齢差のせいもあるのだろう。ミサカよりも頭一つ分ほど背の高い彼女がそうすると、傍目にはアンバランスに見えてしまうが、しかし彼女はそんなことは気にはせず、ただニコニコと笑って続けた。

「ほーんのちょっと、お姉さんとデートしてっただけだから」

「いやいやねーだろ。とミサカは同性愛者の疑惑が発生したアナタに捕まってしまったことに冷や汗をかきながら否定します」

「……やっぱり毒舌過ぎないかなあ？」

01. とある科学と仮面奏者（後書き）

「展開が速すぎはしませんか？ とミサカは（ry）」

「作者が一気に終わらせるつもりらしいからね。理想は四話完結とか言ってたし。ホントは短編でやるつもりだったらしいよ？」

「だからといって自己紹介もせずにここまで打ち解けるとは。とミサカ（ry）」

「なんだか私がナンパしたみたいだねえ。チャラ男ならぬチャラ女？」

「あなたの描写が少なすぎますからね。そのような認識ももつともかと。とミサ（ry）」

「P3Pをやった人にはまるで分らないかもね。でも作者は掘り下げるつもりはあまりないみたい。ネタバレってレベルじゃなくなっちゃうし」

「ちなみにアナタの名前は出てくるのでしょうか？とミ（ry）」

「出さなくて済むように頑張るみたい。短いから何とかなるだろうって言ってたけど」

「・・・実作者のゲーム中ではどのような名前だったのでしょうか。と（ry）」

「公子だってさ。ハム子ネタを見すぎてそれ以外だと違和感が出るんだって」

ハム子かわいいよハム子

02. とある少女と一方通行（前書き）

ほとんどまんがのとおりなんだよ

まんがをぶんしょうにおこすのってよそういじょうにたいへんだっ
たかも

びょうしゃがたりないとおもったひとは「とあるかがく」の4かん
をかってね

ごめんね！

02. とある少女と一方通行

これは一体なんなのでしょいか。

偶然知り合った女性に誘われるままに街を歩き、

アイスを齧り、紅茶を飲み、彼女のポケットから次々に出される
飴やクッキーをともに食べ、

気づけば街灯が点くほどの時間になってしまっていました。

そろそろ実験の時間のはず。

早急に指定されたロッカーへと向かい、装備を入手して実験場へ
と赴かなければならないというのに。

なのに私はそれが嫌だと考えている？

隣を歩くお喋りな彼女との会話を続けたいと思っている？

これは一体……

そうか。これが『感情』というものなのですね。

これが……『楽しい』というものなのですね。

でも、もう行かなくては。

それが私の、このミサカ09982号の存在理由なのですから。

ミサカは殺されるために生み出された存在なのですから。

――とある少女と一方通行――
アクセラレータ

ミサカは夜の帳の降りた学園都市を一人歩いていった。

一方的にデートデートと口にしていたマタタビ使いの少女とはつい先ほど別れた所だ。

彼女は結局ミサカが別れを切り出すまで笑顔のままだった。偶然出会ったばかりのミサカに辛辣な言葉ばかりかけられたというのに。彼女の最後の言葉、『またね』という言葉がミサカには伝わかった。その時になって初めてつらいという感情を理解したほどに、『さようなら』としか返せないことがつらかった。

とはいえミサカはそれを表情に出したりしない。それは軍用クロインであるミサカには必要のない所作だったし、ミサカ自身、どのような表情を作ればいいのか分からなかったからだ。

（このような時には……確か『こんな時どんな顔をすればいいか分からないの』でしたか？ とミサカは学習装置から得た知識を得意げに思い出します。……っと、ここでしたね）

ミサカのやってきたのは学園都市の駅の一つ。そこにあるコインロッカーからチェロケースを取り出すと、再び夜の雑踏へと歩を進めた。

ローファーを履いた足を一歩進めるごとに、ミサカの視界に映る人の数が減っていく。

それは実験のために割り出されたエアポケットへと向かう道。目撃者など出ないよう、計算によって街中に創られた『実験場』。

そして、

「現在時刻は20時48分です。第9982次実験開始まであと1分40秒です」

ミサカは実験の主に出会う。

「指定のポイントへの移動をお願いします」

白く染まり、黒で身を包み、そして紅の瞳を煌々と輝かせる少年。
アクセラレータ
一方通行と。

そして、

「21時00分になりました」

ミサカが頭にかけていたゴーグルを下げる。そしてミサカはチェロケースから取り出したアサルトライフル、FN F2000Rを構える。

「これより第9982次実験を開始します」

それはまさしく『実験』だった。

そう。『戦闘』でも『闘争』でも『演習』でもなく『実験』。

ミサカがライフルを手に使っていた時点では、まだかろうじて『戦闘』と呼べるものだったのかもしれない。

一方通行が壁を叩けば周囲の物質がミサカへと襲い掛かり、一方

通行が地を蹴ればその動きは正しく縦横無尽。

しかしそれでも、一方的に見えたとしてもそれは『戦闘』だった。いや、むしろ丸腰の一方通行と火器で武装したミサカを見比べれば、一方通行が追い込まれているのかもしれない。しかし状況は一変する。ミサカの撃った数発の銃弾によって。

カァン！ と乾いた音が鳴る。

ミサカは一瞬、何が起きたのかわからなかった。

自分は照準を一方通行に向けて引き金を引いた。そのうち一発は、間違いなく一方通行の頭蓋を打ち抜くはずだった。

だというのに、

（だというのに、何故ミサカが倒れているのでしょうか）

ドロリと頬を伝う暖かい物を感じる。ミサカが指で確かめれば、それは初めて見る深紅の液体。

しかし、学習装置テストメントから得た知識を照らすまでもなくミサカは理解する。それが自分の頭から流れている血液であることを。

視線を走らせれば壊れた軍用ゴーグルが目に入る。それは正しく銃弾を受けたかのような破損状態であり、

「――ッ！！」

瞬間、ミサカは手中のライフルを投げ捨てて駆け出していた。

（ゴーグルが無ければ即死でした。どのような能力を用いたのかはわかりませんが、ミサカの撃った銃弾がミサカを襲ったように感じます）

駆ける。駆ける。

ミサカは息を切らせながら、しかし立ち止まることはない。背後からはカツカツとコンクリートを叩く革靴の音。その音にどうしようもなく不安を掻き立てられ、ゆえにミサカは背後を振り返ることすらできない。

いっそ追い駆けてくれれば気が楽だったろう。一定のリズムで響く足音は、どこまで逃げようとも結果は同じことなのだと、そう告げられているようにしか感じられなかった。

そして舞台は路地裏から陸橋へ。陸橋から操車場へ。

と、そこでミサカの逃走は終わりを告げる。陸橋から降ってきた一方通行に進路を阻まれたことで。

「追いつかれたらゲームオーバーだぜエ」

ゆらりと佇む一方通行から距離をとろうとすれば、一方通行の足の一踏みとともに巻き上がった砂利を打ち付けられる。

「そらそらア！ 寝っ転がってるヒマなんざねエぞオイ！」

そこからは正しく『実験』。ただひたすらにモルモットをいたぶるだけの『実験』だった。

「はっはアッ！」

ミサカにはどのような原理が働いているのか理解できないままだったが、しかし一方通行が足を一度降ろすだけで散弾と化した砂利がミサカの機能を削っていく。

腕が軋む。足が震える。視界は歪み、意識は霞む。それでも、今にも倒れそうなほどにふらつきながらも、ミサカはただただ足を動かす。

全ては第9982次実験を完遂するために。一方通行に殺されるという、ただそれだけのために。

『実験』は続く。

一方通行の放った石礫を受ければ、ミサカの背骨が悲鳴を上げる。

血を吐きながらも、操車場にあらかじめ設置していた遠隔地雷を発電能力によって起動させるが、しかしそれでも一方通行には傷どころか埃ひとつ着いてはいない。

電撃、銃弾、地雷による奇襲。人など容易く殺害できるはずの暴力の群れを纏って、しかしミサカはモルモットのままだった。

そして、ミサカは捕まった。

「■■■■ a ■■■、■■■■ j ■■■■■■■■■ h ■■■ m g ■■■■■■■■■ ! ! !」

ミサカには一方通行の言葉が言葉として認識できなかった。頭脳を埋め尽くす信号に世界を染められて。

ズブリと一方通行の指先がミサカの左足を潰していく。ブチブチと繊維の千切れる音が響く。

最早ミサカは痛みを感じていなかった。

よく『大きすぎる痛みは脳が認識することを拒絶するため、返って痛くはなくなる』と言われるが、それは真実ではないことをミサカは知った。

これは『熱』だ。

痛みは確かに感じない。感じるのはただ巨大な『熱』。どこを傷つけられているのか。『熱』の発生源はどうなってしまったのか。今のミサカには何も感じられない。

ただただ己の下半身が巨大な炎に焼かれている光景しかイメージ。世界は赤く染まっていた。

一層大きな音が耳に届く。頭蓋内を荒れ狂う炎のイメージがより一層高まり、

ブチリと、

ミサカの左足が引きちぎられていた。

（ああ。これで終わりなのですね）

ヒューヒューと息が漏れる。

既に意識は消える寸前。命の灯すら消えかけているのだから当然と言えば当然か。

最後のあがきと最高威力で放った電撃も、一方通行には届かなかった。

打つ手などない。足掻く術もない。

（ならばココがミサカの終着点なのでしょう。もったもミサカはそのため生まれ調整されてきたのですから、第9982次実験を完遂したことを誇りに思いこそすれ、他のことなど何も……）

いや、それは嘘なのかもしれない。そう。それはきつと嘘。

大の字に倒れたミサカに対し、一方通行はトドメを刺すつもりなのか、操車場のレールの一つを地面から引きはがしていた。

（串刺しがお好みですか。列車に潰されてミンチになるよりはましなのでしょうか？）

一方通行が引きちぎったレールを上空へと投げる。

それは如何な能力の結果だろうか。空高く舞ったレールは槍となつて、夜空を見上げるミサカの視界めがけて降ってくる。

しかしミサカは何も思わない。おそらく数秒後には自分の頭は潰れたトマトよりも悲惨なことになっているだろうというのに、そのことに対する恐怖はない。

ただ一つ。ミサカの頭を埋め尽くしていたのはただ一つの思い。

それは『実験』を成功させた誇りでもなければ、自分を殺す一方通行への憎しみでもない。『実験』を計画した科学者への恨みも無ければ、死ぬことへの恐怖も無かった。

ただミサカは思っていただけ。数時間前に分かれた、初めてできた『友達』のことを。

（そういえば、あの人はなんという名前だったのでしょうか。ミサカが09982号だと名乗りたくなかったために、あえてそのような話題になることを避けてしまいましたが）

それだけが心残り。最初で最後の『友達』の名前を知ることが出来なかったことだけが。

目を閉じる。眠るように、安らかに瞼を下す。

そして、

グシャリと、

人間が貫かれる音を聞いた。

ないはずなのに。

頭を潰されれば音など聞こえ

「アア？」

一方通行のあげたのは疑問の声であり、

「あ、ああ……」

ミサカのあげたのは嘆きの声だった。

ミサカを殺すために放たれたはずの鉄の槍が襲ったのは、

ミサカにとって初めてできた『友達』の中心だった。

右胸から腰へと、鉄の塊で貫かれた『彼女』が、ミサカの前に立っていた。

02. とある少女と一方通行（後書き）

「いや、え？　ちょ？　私死んでない！？　これ私死んじゃってない！？」

「レールの槍。これがホントのレールガンですかw。とミサカは（ry」

「いやいや、笑えないから！　主人公死んじゃってどうするのこれ！？」

「素晴らしい自己犠牲でしたね。AMENとミサカ（ry」

「いやいやいや。この作品って最強物でしょ！？　私が最強なんじゃないの！？」

「おそらくアナタの犠牲でミサカがスーパーミサカ人になるのではないのでしょうか？　とミサ（ry」

「いやいやいやいや。まだペルソナのペの字も出てないのに退場！？　なんで！？」

「作者の中でアナタの序列が低いんじゃないでしょうか。風花萌えとか言っていました。とミ（ry」

「もう嫌あ。ちょっと作者のバカにハルマゲドン撃ってくる」
「手伝いましょう。アレにとってはご褒美のような気もしますが。と（ry」

9982号！　俺だあっ！　踏んでくれえっ！！

03. とある最強と不滅存在（前書き）

おもいのほかぐだぐだになっちゃったんだよ

さいしょかきあげたときはいちまんきゅうせんじとかだったんだよ

はんぶんにくずったけどまだぐだぐだかも

ごめんね！

それとまたせちゃったこともごめんね！

03. とある最強と不滅存在

一人目を殺した時、自分は人殺しになったのだと理解した。

十人目を潰した時、自分は人から外れてしまったのだと認識した。

百人目を抉った時、自分は悪魔なのではないかと錯覚した。

千人目を刻んだ時、自分は悪魔などではなく、ただ薄汚れただけの怪物なのだと自覚した。

一万人目を殺してしまえば、きっと自分は彼女たちを『何人目』ではなく『何体目』としか数えられなくなるのだろう。

それでも止まるわけにはいかなかった。心が壊れようと、俺が俺でなくなろうと、引き返すわけにはいかなかった。一人目を殺した時点で、自分には無敵になる以外の選択肢が消失していた。

だってそうだろう？ 全てはもう今更だ。9982人目を殺さなければ、これまで殺された9981人の死は無駄ってことになっちまう。このクソツタレな『実験』を止めるってんなら、何故その選択を『一人目』を殺す前にしなかったンだってことになっちまう。

俺が無敵に到達することが、犠牲になった妹達^{レベル6}への手向けだなんて事は考えちゃいない。そんなことが慰めになるとも思っちゃいない。

だが、俺はもう止まらない。俺自身が俺を止められないってんな

ら、きつと誰も止められない。

だから俺はこれからも殺し続けるンだろうと思っていた。精々『無敵』に憧れ、ただただ暴れる怪物を演じ続けるンだろうと思っていた。

自分の体を張ってまで他人を救おうなんて考えやがる、その『怪物』に出会うまでは、な。

——とある最強と不滅存在——
ネバーエンド

突如『実験場』に侵入してきた女を一方通行は正確に認識していた。
アクセラレータ

元より学園都市二百三十万人の頂点に君臨する一方通行だ。その頭脳の回転は、『突然現れた第三者』程度のイレギュラーに停滞させられるようなものではない。

様々な実験に貢献させられてきた一方通行には敵も多いし、名を上げるなどというふざけた理由でスキルアウトに襲われることもしよっちゅうだ。何の前触れもなく超長距離狙撃を受けることに比べたら、誰も来ないはずの『実験場』に第三者が現れたくらいなんだというのだ。

加えて彼には最強の超能力『ベクトル操作』がある。第三者が、一方通行がミサカ9982号に向け『槍』を投擲した瞬間を隙と捉えて奇襲を狙ってきた襲撃者だったとしても、一方通行には傷一つつけられないだろう。

彼の頭脳は瞬時にそこまで計算し、ゆえに一方通行は傍観していた。

結果、間の抜けた声を上げることになる。

第三者の行動。それは極めて洗練された動きではあったが、しかし単純なものだった。

ただ倒れたミサカを後方へと引っ張り、代わりに『檜』の射線に入っただけ。

その単純な行動が一方通行には理解できない。

女が何故そんな行動をとったのかは推し量れる。結果を見れば明白だ。

女はミサカをかばった。ただそれだけのこと。しかしそれだけのことが一方通行には理解できなかった。

足を失い今も血を流し続けているミサカ9982号は間違いなく死に体だ。『トドメ』からかばわれたとしても、放っておけば死んでしまうだろう。

その上ミサカは人間ですらないのだ。単価十八万で量産されるモルモット。そんなものを自分の命を捨ててまで助けようとするなどと、『人間』の思考ではない。もっともそんなガラクタを態々手作業で潰していた自分も『人間』ではないのだろうが。

いったいどんな奴だったのだろうか。手足を引きちぎられようと肉を弾けさせられようと、決して命乞いをしなかった9981人のミサカと違い、9982号が初めて人間らしい声を上げていたことも気になった。己の死を淡々と受け入れる感情のないモルモットにこのような声を上げさせる女のが気になって、一方通行はせめて顔だけでも拝んでおくかと一歩近づくことに。

と、すでに事切れていると思っていた女の腕が動いた。

「——つつつああああアアアアアアアアアアアアアア！」

それは夥しい数の死体を量産してきた一方通行をして絶句させるに足る行動。

自分の腕よりも太い鉄のレールを、誰が見ても非力そうだと思わせるような女が片手で引き抜く光景。

どう見ても致命傷を受け、目を閉じればそれだけで安らかな永遠の眠りにつけるだろうというのに、尚拷問のような痛みを己に課す『怪物』の絶叫。

血を吐き、血液を撒き散らしながら、ガランと『槍』を引き抜いた、『バケモノ』の立ち姿だった。

女は体の中心にポツカリと孔を開けながらも、それでも倒れない。それどころか、自身の状態など気にも留めないと言った風に、世間話をするような気軽さで口を開いた。

「ハア、ハア………ふう。私としたことが連絡先を聞かずに別れるなんてウツカリしていたと思ったけど、おかげで『間に合った』ということとは、不幸中の幸いってことなのかな？　それとも人間万事塞翁が馬？」

「……オイ。オイオイオイオイ！！　　いったいこいつはなんの冗談な——」

言葉は続かなかった。呼吸も忘れ、ただ目の前の茫然とするしかなかったから。

一方通行を啞然とさせた現象。それは目の前の女の身に起こっていた。

（オイオイ。まさかコイツは）

一方通行は繰り返すまでもないことだが学園都市二百三十万の学生たちの頂点に君臨する存在である。

ゆえに彼は他の能力者に対して興味を抱かない。すべての人間は『格下』でしかないのだから。

知名度という点では裏に生きている一方通行を凌駕するであろう第三位、超電磁砲^{レベルガン}にしたところで、おそらく実験体^{ミサカ}のオリジナルであるという形での絶対能力進化実験の関係者でなければ、発電能力者であるということすら知ることはなかったかもしれない。

そんな彼が興味を抱いた存在がいた。いや、『そのような能力者』がないかと興味を持ち、探した結果知った相手であることを考えれば、順序は逆ともいえるのだが。

とにかく彼は『ある能力』を持った学生を探していた。大量虐殺者と成り果てた今の自分から見れば、なんとも馬鹿らしく思える話ではあるが、彼は探したのだ。『自分に殺せない能力者』を。常に反射の膜を展開している自分が、傷つけることを恐れなくても済む相手を。

結果、候補としてあがったのは以下の三名。

世界に存在しないはずの物質を作り出す第二位、^{ダークマター}未元物質。『原石』であり学園都市でも解析不能な能力を行使し、それゆえレベル5の末席を与えられている第七位・ナンバーセブン。

そして、対軍戦力として数えられることが基準である超能力者（レベル5）のカテゴリーにおいて、しかし長距離からの狙撃でもされてしまえばなんの防御の手段も持たない精神操作系能力者である第五位の、さらに下に位置付けられた異色の存在。

「^{ネバーエンド}テメエ。第六位、不滅存在だな」

一方通行の目前で展開される光景。それは体の中心にポツカリと空いた穴が、みるみる塞がっていくというものだった。まるでビデ

オテープを巻き戻しているかのように。ジジッとノイズの乱れすら幻視させる異様な光景だった。

それをまざまざと見せつけられれば、『彼女』の名を知る者ならば確実に理解するだろう。『彼女』こそが戦闘力を持たない超能力者。^{オートリバース}肉体再生系能力者の頂点。

「だいせーかい。ネバーエンドって呼ばれるのは、あまり好きじゃないんだけどね。そっちは一方通行、だよな？」

再生が終わったのだろう彼女の血色はみるみるよくなっていく。つい先ほど土気色の顔で死にかけていたとは思えないほどに。

「あア。で？ そいつを知ってて乱入してきた理由を聞かせてみろよ。ヒーロー気取りですかア？」

「そんなところかな。どっちかっていえばヒロイン気取りだけど」

もっとも、と女は続ける。

「話し合いで片付けばそれがベストだけどね」

「話し合いだア？」

「うん。この子がなんで君に殺されそうになってたのかは知らないけどさ、見逃してあげてくれないかなあ、って。私も痛い思いしたのは水に流すからさ」

何を言い出すかと思えば、と一方通行は笑いをかみ殺さずにはいられなかった。

『実験』について何も知らないということは、彼女にバックがいるわけではない。そもそも商売敵の研究施設あたりに送り込まれたというのならば、モルモットを助けるような真似をするとも思えなかったが。

それはつまり何の打算もない純然たる『人助け』。そのうえ死ぬかもしれないような、いや能力が無ければ確実に死んでいただろう攻撃を受けたことすら水に流すと来ている。

（このクソツタレな街の住人に、それも一応は俺と同じレベル5に、こんな突き抜けた善人がいやがったとはなア）

頭の中に花畑でも作ってそうな能天気さだ。どこまでも突き抜けた表の住人。闇なんても、匂いすらも嗅いだことのなさそうなお気楽さ。

（だが、付き合ってやる義理はねエなア。なんたって俺は『怪物』だからなア）

故に一方通行は笑みを作る。寧猛な、狂気に歪んだ笑みを。

「ハッ。随分とまア弱腰な英雄サマだなオイ。バケモンってのは退治する以外ねエだろオが」

右足を軽くあげる。

「ちょうど齒ごたえのねエモルモット処理にも飽きてたところだ。楽しませてみろや！」

踏み下ろす。それだけでベクトル操作された石礫が散弾の如く彼女に襲いかかった。

これでカタが付くとは一方通行も思っていない。相手は仮にもレベル5の一角。せいぜいがレベル3程度の能力しか持たない妹達とはわけが違うのだから。

しかし彼女の動きは一方通行の想定の上を行った。

ホッと間の抜けた声とともに、彼女の腕が動く。

それは本当に何気ない動作に見えた。まるで纏わりつく羽虫を振り払うかのような力のない一振り。

しかしその腕の一振りのみで、目視することすら困難なはずの数多の石礫は弾かれていた。

「はア？」

思わず一方通行は声を漏らしていた。

（なんだ、今の速さは？ コイツの能力は肉体再生系だろオが？）

一方通行にとっては攻撃とも呼べないほどの稚拙な技ではあったが、それでも防がれるなどとは思っていなかった。

常人に可能な動きではない。それは数分前に妹達の一人が証明している。軍用として調整を受けた妹達ですら反応できずにされるがままだった攻撃に、あっさりと対処してみせるこの女はなんだ？ そんな疑問が頭を埋め尽くしていた。

対して彼女は特に気にした風もない。なんら特別なことなどしなかったと言っているかのように。

「そっか。話し合いで何とかしたかったけど。ま、仕方ないね。なら頑張りますか。実は痛かったことちょっと怒ってたりしてっ！」

彼女の体が傾ぐ。と一方通行が思った瞬間には、すでに彼女の顔が目の前にあった。

目算でも十メートル近くはあった距離を一瞬で詰められる。驚愕とともに一方通行は振り払うように腕を叩きつけようとした。

しかしそれは軽くかわされる。当然だろう。彼女の速度は一方通行に届くものではない。触れることさえできればベクトル操作で勝敗など一瞬で決まるというのに、まるで翻弄されるかのように一方通行の腕は虚空を薙ぐばかり。

「悪いけど、すぐに決めちゃうよ！ ミサカちゃんを病院に連れて行きたいしね！」

声とともに再び一方通行の視界から彼女の姿が消える。

瞬間ボキリと、本来であれば生理的嫌悪感を抱かずにはいられない音が操車場に響いた。

響いた音の発生源は、一方通行の顎、ではなく、それを横からの一撃で殴った彼女の拳だった。

「あうっ」

たまらずといった風に彼女は距離をとる。一足飛びで十メートル以上を飛び、瀕死の重傷を負って尚立ち上がろうともかくミサカの隣へ。

追撃に移るのは簡単だった。しかし一方通行は思いとどまる。彼女の右腕が傍目から砕けていることが見て取れるほどに無残に折れ曲がっていたからだ。

とはいえそれは、なにも一方通行がそれを哀れに思ったからというわけではない。ただ不可解だったからだ。

彼女がダメージを負ったのは間違いなく自分の『反射』を受けたからだろう。しかしそれにしてはダメージが深刻すぎた。

一方通行が常時展開している能力の設定は『反射』。銃弾を受ければそのまま跳ね返し、電撃を喰らえば、それは相手にそのまま跳ね返る。

ならば殴られた場合はどうなるか。相手の拳は割れるかもしれない。しかしその程度が関の山だ。極端な話、とても固い壁を殴るのと同じなのだ。ただそれだけで拳はおろか腕まで粉々になるなど、よほどの筋力を持っていたとしても難しいだろう。

「わかんねエなア。てめエ、マジで肉体再生か？　オートリバース　まだ肉体操作との多重能力者だってヨタ話されたほうが納得がいくぜ？」

「その質問には答えてもいいんだけど、代わりにこっちの質問にも答えてもらえるかな？」

砕けたはずの腕を、すでに再生させてしまったのだろう、プラプラと確かめるように振りながら、彼女が言う。

「あなたの能力は『反射』なのかな？　殴った感じが正しくそれだったんだけど？」

「ハッ。レベル5ともなれば察しもよくなるわな。そこで転がってる奴なんかは一万回近くも見ているはずだってエのに、未だにバリアなんてずれたこと考えてたくらいだが」

一方通行の返答に、彼女は『やっぱりね』と頷いた。
と同時に、何かに気づいたのか、

「もう一個サービスしてもらってもいいかな？　一万回って？」

（あア。そうか。コイツは妹達なんて知らねエってわけだ）

自分が命を懸けてまで助けようとしている相手が、単価十八万で量産可能なクローンだと知れば、どのような反応を見せるのか。そんな意地の悪い思考が鎌首をもたげる。

故に一方通行は『サービス』してやろうと、答えてやることにする。極上の笑みを浮かべながら。

「知らなかったのかア？ ソイツはなア、軍事利用されるために生み出され、実験で俺に虐殺されるただけに生かされてるだけの量産品なんだよ。俺の殺した9981人のクローンの妹。俺の殺す予定の二万体のうちの一体。命乞いも満足に出来ねエような粗悪品だ」

彼女の背後でミサカの瞳が揺れる。自分が『きちんとした人間』でない知られたくなかったのだろうか。人間らしい感情など微塵も持ちあわせていないと思っていたというのに。

「ソイツらは人形みてエなモンだ。白衣着て人間の振りしてるだけの糞共に作られた人形。腕を？ とうが足を潰そうが問題ねエ。首を飛ばしたとしても、次のクローンが出てくるだけの話ってわけだ。なア？ てめエはそんな奴を助けるつもりだってエのか？ 一山いくらのガラクタのために命を「賭けるよ？」……ンだと？」

「賭けるって言ったのよ。クローン？ それがなんだったのよ！ 友達だと思うことにそんなカテゴリーなんて邪魔なだけ！ 私には犬の仲間もいたし、ロボットの戦友もいた！ 死の宣告者なんて名乗ってたバカとも友達だし、力を司る者なんて訳の分からない人だって友達なもの！ クローン？ 二万人の妹？ だからなに？ 全員連れて来いってのよ！ みんなまとめて絆を作ってあげるから

!!」

本来ならば、『一方通行』と言う名のバケモノならば、笑い飛ばすべき戯言なのだろう。

しかし一方通行は言葉を失うしかなかった。『一方通行』ではなく、『■■■■』の心に、その言葉は強く突き刺さっていた。

『無敵^{レベル6}』を渴望したのは何故だったのか。誰も向かってこない絶対的な力を求めたのは、自分の力が傷つけてしまわない相手を探したのは何故だったのか。その答えは今もなお胸の奥に眠っている。彼女の言葉はソレに強く響いていたのだった。

しかし、

「あア、そオカよ！ だったら俺を止めてみろってンだ！！ てめエが何をしようが、俺の『反射』は貫けねエぞ！！」

今更止まるわけにはいかないのだ。もう、止まるには遅すぎるのだから。

だが彼女の瞳は揺らがない。先ほどもで見ていた能天気そうな色はすでになく、今はただ、燃えるような意思の炎が瞳を赤く染めるのみ。

「……貫くつもりなんてないわ」

そして彼女は右腕を持ち上げる。

「『反射』ごと飲み込んであげるから」

親指と人差し指のみを伸ばすその手の形は、子供の真似する銃そ

のもの。

「その前に質問に答えてあげる。私は確かに肉体再生系能力者じゃない。不滅存在^{ネバーエンド}はアレイスターから名乗れと命じられた能力名」

彼女は手で作った銃を自身のこめかみに添える。

「肉体再生は私の能力の一端にすぎない。アレイスターはこう言っていたわ。私の能力は能力具現^{AIMプロジェクト}。AIM拡散力場に干渉し、力の象徴を作り出すもの」

一方通行は再び幻視していた。ジジッと、世界にノイズの走る光景を。

「でも私は元の呼び名の方が好き。今から見せてあげる。『彼』は私の力の内でも、とりわけ長く一緒にいた存在。姿を変え、薙刀と言う形をとってだけどね」

そして彼女は深く深く息を吸い込む。一方通行も倒れ伏したミサカも、彼女の能力行使を邪魔してはならないと強制されているかのごとく、指の一つさえ動かさなかった。

そして彼女が言葉を紡ぐ。

「ぺ」

桜色の唇が震え、音が奏でられる

「ル」

一方通行だからこそ理解できる。彼女の鳴らす一音ごとに世界のAIM拡散力場が収束していくのが。

「ソ」

世界が塗り替えられたかのような錯覚。あらゆる音が消え、世界はただただ彼女の舞台と化す

「ナ」

存在しないはずの撃鉄が振り下ろされた音が、夜空の下、朗々と鳴り響いていた。

舞い上がるは蒼い焰。

彼女を中心に巻き起こる旋風は、蒼い光を巻き起こし、それは何故か蝶の舞う様にも花の散る様にも見える。

その旋風の中心、存在しない銃の引き金を引いた彼女と、一方通行の視線が交わる。

しかしそれは一瞬のこと。中空に浮かび上がったそれを見て、一方通行の目は釘付けになった。

それは孔雀にまたがる男の姿。

一目で理解する。『理解できない存在』であることを。

それもそのはず。一方通行には与り知らぬことではあるが、彼女の呼び出したのはヒンドゥー教最高神シヴァの次男。六十四の名前を持つ軍神にして神軍の最高指揮官。かつて彼女とともに死の宣告者との戦いに挑んだ、彼女にとって最高の相棒。人の世には存在しない神の支柱なのだから。

彼女の指が一方通行を指し示す。

「カルティケーヤ」

唇が動く。

「■■■■■」

音が鳴り、

しかしそれが一方通行のもとに届くことはなかった。

音が走るよりも早く、光が生まれる。

それは真つ白な小さな玉だった。

突然目前に現れた光に、一方通行は瞬時に反応。音や光までも『反射』の適用範囲に収め、あらゆる攻撃に対応するための演算をくみ上げた。

後から思い返せば、それは生存本能によるものだったのだろうと推測できる。生物である限り捨てる事など出来ない『格』が存在し、空中にて槍を担う男の『格』から見れば、超能力者の頂点であってもはるかな『格下』であるとな本能が理解してしまったのだろう。

故に一方通行は、初めて己を守るために意図的に能力を行使した。自動で展開される『反射』を己の演算で底上げし、さらに光への解析を試みる。

それは数百分の一秒にも満たない刹那のことだったのかもしれない。

小さな光の球でしかなかったそれは、爆発するかのように膨らむ。まさに極光。火とも雷とも違う、力を持った光が一方通行の体を打つ。

いや、最早打たれているのか飲み込まれているのかも分からない。全てを焼き尽くす炎にも思えるし、全てを飲み込む重力場ともとれる。

解析など不可能。知ろうとすれば脳が軋み、悲鳴を上げる。それは理解してはならない存在を知ろうとすることへの警告。神の力を欲すれば、裁きが下るのは道理。

ならば、

(――そうか)

唐突に理解する。この先にあるのが『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』の座。

(――そうか。そオカよ。コレが理解できるのが絶対能力者^{レベル6}だってンなら、妹達を二万人殺そうが、二億人殺そうが、意味はねエ。そんなモンでこの域まで行けるわけがねエ)

『実験』の果てに絶対能力に届く未来はないと理解し、一方通行の体から力が抜ける。今のこの瞬間に解析しきるといふのもどだい無理な話だろう。初めて己の死を身近に感じ、しかし嘆く気持ちはない。あえて悔いがあるとすれば、無意味だった殺戮の犠牲者たちを生んでしまったことだけ。

解析を諦めてしまえば、あとは早かった。走馬灯を見せるがごとく凝縮し加速した時間が元に戻り、瞬時に世界が極光に包まれる。

これは確実に死ぬな。そう思いつつも、しかし抗おうとは思わなかった。逃げることに徹すれば、生存は可能だったかもしれないが、今更こんな自分に生きる資格があるとも思えない。もとより生きる理由など『死ぬのが面倒だから』という以上のものなど無かったほどだ。

ならばこんな幕切れもいいだろう。頂点にふんぞり返っていた王サマを格下が打ち倒す。はたから見れば中々痛快なはずだ。

（それに、このまま殺し続ければ俺は『怪物』以上のナニカになっちまってたンだろう。ならここで、まだ『怪物』のまま死ねるってのはありがてエことなンかもしンねエな）

ああ、そういえばひとつだけ心残りがあったか。

（俺は不滅存在の名前も知らなかったンだな。まア俺も一方通行としか知られちゃいねエし、あまり望み過ぎは良くねエ——）

そこで、一方通行は完全に極光に包まれた。

03. とある最強と不滅存在（後書き）

「セロリとの戦闘シーン、削りすぎではありませんか。とミサカは（ry）」

「しょうがないじゃん。全部反射されちゃうし、殴って反射、蹴って反射じゃgdgdでしょ？」

「ぶっちゃけセロリ強すぎなんですよ。まともな戦闘シーンにするには幻想殺しが必須ですし。とミサカ（ry）」

「反射を抜くことができれば弱すぎるしね。セロリ無双かオリ主無双かの二択って」

「なんちゃってラッキーそげぶで足腰ガクガクになるモヤシですからね。ところでアナタの能力の説明なんかはされないのでしょうか？ とミサ（ry）」

「たぶんしないかなあ。あまり長々とやるネタでもないし。一応『再生』の方は治癒促進・大で、光の玉はメギドラオンでございます」

「オーバーキル乙。メギドでもぶっちゃけオーバーキルっぽいですが。とミ（ry）」

「だからといって他に攻め手はないじゃない？ 全属性反射なんてメギド系以外意味ないしね。どうせなら派手な方で」

「ところで何故カルティケーヤなのでしょう？ と（ry）」

「オルフェウスがメギドは現実味ないしタナトスもねえ。メサイアのスキル構成がバッチリ嵌るんだけど、強すぎる気がして。セロリたん死んでないといいんだけど」

セロリたんペロペロしたいお

04. とある少女と学園都市（前書き）

またまたべるそなをぷれいしてないひとにはわからないはなしがお
おいんだよ

でもねたばれになるし、しゅうせいすることはないかも

どうしてもきになるってひとはげーむをかってぷれいしてね

ふえす・ぽーたぶる。りょうほうやってくれるとうれしいな！

04. とある少女と学園都市

全てが終わり、月光館学園の屋上で目を閉じた私が再び目覚めたのは見知らぬ場所だった。

混乱しながらも調べてみれば月光館学園は存在せず、桐条グルー
プという名も見つけることは出来なかった。

その上東京に存在する『学園都市』。なんらかの『異変』に巻き
込まれたのではと予測を立てるのにそう時間は必要ではなかった。

なんとかして元の世界に戻りたい。みんなと会いたかった。

ゆかりは心配してくれてるだろうか。

美鶴さんはなんだか怒ってる気がする。

風花はオロオロしてそう。

順平はチドリさんをほったらかしにしてないといいけど。

真田先輩は手を尽くして探してくれてるんじゃないかな。

天田君は泣いてたりして。

コロちゃんは私を探して駆け回ってる気がする。

アイギスは自分がついていればなんて自分自身を責めちゃって
るかも。

荒垣先輩は、きっと……

だから私は帰リたかった。

学園都市に來たのはそのため。世界最高の科学力を有しているらしいこの街なら、何か手がかりがあるんじゃないかと思って。

そしたらすぐにこの統括理事長さんに会うことになって、なし崩し的に霧が丘女子の三年生に編入することに。

そして今日の昼間のことだ。『戦車』のコミュニティが発生したのは。

ここでコミュニティが生まれたことに疑問はない。既に一度、『塔』のコミュニティが発生していたのだから。

その時からなんとなく抱いていた仮説が、形になった気がした。

かつて私がとどいた『宇宙^{ユニバース}』のアルカナ。神にも等しい力を手にしたあの場所まで再び行けば、私は帰れるんじゃないかと思って。

その思ったら、『Wiping All Out』が頭の中を流れ出していた。

I'm not a princess.

そう。私はお姫様なんかじゃないんだもの。

見知らぬ場所にただ一人。だからって助けられるのを待ってなん

かられないわ。

幸い私の裡にはカルティケーヤがいた。代わりに孔雀御前は消えていたが、この状況ではプラスにしかないだろう。

私は決心する。コミュニティを見つけて、かけがえのない絆にまで育てて、きっと取り戻す。失くしたものを全部この手に。

Wiping All Out.

邪魔なものは全て叩き潰してでも。

——とある少女と学園都市——

「なんで俺は生きてんだ？」

心底意外そうな声。そこで彼女は一方通行が目を覚ましたことに気づいた。
アクセラレータ

「あ、気づいた？」

そう声をかけると一方通行はガバツと跳ね起きる。それも当然だろう。つい先ほどまで、一方通行の意識の上ではつい一瞬前まで彼女とは敵同士だったのだ。そんな彼女が倒れた自分の隣に座っていれば、警戒されるのも頷けた。

とはいえ彼女にしてみれば戦いは終わったことであるし、わざわざ回復までした相手と今更ことを構えるつもりもないのだが。

「治療しておいたけどおかしい所とかあったりしない？ 多分平気だとは思うんだけど」

「……なんのつもりだ、てめエ？」

「別に何か企んでのことじゃないよ。運よく治療してあげられる手段が私にあって、運よくアナタの『反射』が切れていた。だから治療しただけでことで」

そう。全ては運が良かったからだ。カルティケーヤが回復魔法を継承していなければ打つ手などなかった。そもそも彼女の攻撃で一方通行は確かに虫の息だったわけだし。

もっともツイていたのは一方通行だけではない。万能属性を持っていたことを考えれば、彼女もまたツイていた。全てのペルソナが『反射』への対抗手段を持つわけではないのだから。

（にしても永続テトラカーンって。マカラカーンもか。チートってレベルじゃないよね。エリザベス辺り激怒しそう）

かつてエリザベスのピクシーに殺されかけたことを思い出し、彼女は苦笑する。

そんな彼女をよそに一方通行は何やら考えていたようだったが、ふと目線をそらすとその赤い瞳を見開いた。

視線の先には先ほどまで死にかけていたミサカの姿。それも一方通行が千切ったはずの足が繋がった状態のミサカの姿だった。

「おい、不滅存在^{ネバーエンド}。アイツの足もてめエが治したってのか？」

それは当然の疑問だろう。彼女的能力が肉体再生に留まらないことは先ほどの攻撃ではっきりと理解したが、それにしても他者の傷まで回復させてみせるなど、一方通行の知る『超能力』では説明できない点多すぎた。

「そうそう。君の傷もね。気絶してくれたことで『反射』されなかったのだ幸いだったね」

しかし自分のしたことがどのような意味を持つのかも理解してしないように彼女は笑う。

「まるで理解できねエな。俺を生かしててめエにメリットがあると思えねエ。むしろ俺のやったことを思えばトドメを刺すのが普通なンじゃねエのか？」

「なんで？ 私はアナタを殺したいわけじゃない。ミサカちゃんを助けたかっただけ。それともまだミサカちゃんを殺そうなんて思ってたりするの？」

なんとなくだが彼女は一方通行がそうするとは思えなかった。一方通行が気絶している間、ミサカから『実験』についても聞いてはいたが、そもそもからしてミサカの話聞いた彼女は一方通行の方をこそ被害者だと感じていたのだから。

「俺は万人近く殺してンだぞ？ 負けました、はい潔く『実験』は諦めますなンて言うとも思っただけのか？ 大体俺が諦めるなンて言ったとしても、ソイツが認めねエだろオが。誰が一万回も殺された相手を許すってンだ」

「そのことですが、とミサカは話に割って入ります」

と、それまで彼女たちの会話を傍観していたミサカが口を挟んだ。一瞬一方通行の表情が揺れた気がしたが、それは彼女の思い違いだったのだろうか？

「一方通行が『実験』への参加を取りやめるというのなら、ミサカは何も言いません。もっとも『実験』を取り仕切っている研究者らはそれを認めたがらないでしょうが、一方通行の決定に口答え出来るようなものがあるとも思えませんし。とミサカは自身の考えを述べます」

「あア？ てめエの頭にまで花畑が出来ちまったンですかア？ 俺はてめエを殺そうとしたし、てめエらを殺しまくってンだぞ？」

「すべては『実験』のためでしょう？ それに彼女から言われ気づきましたが、どう考えても非はミサカ達の方がありました。とミサカ「ちょっと待てオイ」……はい。とミサカはミサカの話が止められた事に慥然とします」

「てめエらに非があったただア？ いったい不滅存在は何言いやがった？」

一方通行とミサカの視線が彼女に集まる。

何も彼女は特別なことを言っただけでもなかった。ただ常識を語っただけである。

「ミサカちゃんに聞いたけどさ、『実験』では二万人のミサカちゃんの姉妹がアナタを殺そうと襲いかかってたんでしょ？ 二万人がかりで一人を殺そうとか、どう見ても悪いのはミサカちゃんたちだと思っただけだ」

一方通行が『あらゆるベクトルを操作する最強の能力者』という『前提』があるからこそ見えなくなっていた事実。それを彼女は指摘しただけ。彼女が『反射』を一つの能力として考えるペルソナ使用であるからこそ、一方通行を特別視してはいなかった。彼女が今つけている仮面・カルティケーヤも電撃を吸収するという能力を持つし、かつて彼女が手にしていたペルソナの中には『打撃反射』や『斬撃反射』といった能力を持つ者もいたのだから。

「二万対一つ。しかも銃器で武装してたらしいし」

「その上ミサカ達は軍用に調整されたクローンです。さらに学習装置^{テストメ}にて人を殺すための技術を叩きこまれています。加えて言うならば異能力者^{レベル2}から強能力者^{レベル3}程度の能力を有しており、百体もの妹達がいれば小国の軍隊程度ならば余裕です。とミサカは己のハイスペックを自画自賛します」

「そんな子たちが二万人がかりで一人の高校生？　くらいの人を殺そうとするとか。正直ないわーって感じかな？」

もし自分に対してそのようなことをされればどう思うか。彼女は想像してみる。

自分ならば凌ぎ切ることも出来るだろう。かつての戦友であるボクシング部のエースは至近距離からの銃弾を避けていたし、自分も射撃に関しては問題ない。治癒促進で傷は治せるし。狙撃でもされれば危ないかもしれないが、二万人に狙われるともなれば狙撃されやすいポイントには近づかないだろうから平気な気もする。

電撃に関してはカルティケーヤが何とかしてくれる。むしろ電撃吸収のスキルのおかげで回復できるくらいだ。軍用に調整されているという話だけれど、ロボットの友人よりもスペックが高いとは思

えない。接近戦で後れを取るようなことはないはず。

端的に言えば彼女にとってもミサカはいつでもできる相手である。だが、それは性能^{ハード}を比べた場合の話。精神^{ソフト}はどうか？

（絶対怒るね。二万人がかりで殺しに来るとか。それも完全武装で。そんなことされたら絶対怒る。裏にいる研究者とかもまとめて一掃したくなっちゃう。ハルマゲドンでございますしたくなっちゃうよ）

にもかかわらず一方通行を自分が殺されても当然だと言う。彼女にしてみればどちらが頭の中にお花畑を作っているのやら、と言いたいほどだ。

「どう考えても非はミサカ達にあったのでしよう。一方通行を殺そうと多勢で、しかも世界最高の科学力で作られた銃を構えるのですから、反撃で殺されたとしてもぶっちゃけ自業自得でしょう。そもそも元より殺されるために向かって行ったのですし。むしろそれに怒りを覚え皆殺しにしてやるぜと一方通行が思ってるのではないかと懸念します。とミサカは一方通行の真似をしながら戦々恐々します」

「……チツ。自業自得だア？ 俺が殺しまくったのは事実だってエのによ。おめでたい奴らだ」

そこで一方通行は一度言葉を切った。

何かを逡巡する様子。葛藤に苦しむように眉を顰め、

しかし再び口を開いた一方通行は、どこか憑き物が失せたような表情をしていた。

「『実験』は終わりだ。元々こんな『実験』で絶対能力者^{レベル6}になれるとも思えなくなってたところだしなア。研究者どものほうは俺が話

をつけといてやる。上は揉めそうだが、まアなンとかなンだろ」

「おー。やったねミサカちゃん。一方通行は許してくれるってさ」

「はい。ですが一応言わせてください。一方通行。今まで申し訳ありませんでした。とミサカはけなげにも頭を下げます」

「ハッ。いらねエよ。そのおめでたい持論に俺を巻き込むンじゃねエ」

よかったよかった。と彼女は頷く。

いろいろとしがらみは残るのだろうが、そういうものはゆっくりと解きほぐしていけばいい。今のこの瞬間にすべてを解決させようなどと、不可能もいいところだ。

と、そこで今日二度目の『音』が鳴る。

それはコミュニティの生まれた音。ほのかな絆の産声。かつて至った『宇宙^{ユニバース}』への道がまた一つ開いた音だった。

「あらま。こんなところで『半身』と同じアルカナが出てくるとは」

「あア？」

怪訝そうにこちらを見る一方通行とミサカ。対して彼女はにやりと口角を上げて見せる。

「実は私ももう一つ上を目指しててね。この街の流儀で言うならレベル6だけど」

「何故この状況でそんなことを言い出すのでしょうか。とミサカは突然振られた話題に可愛らしく首を傾げます」

「そのレベル6への道つてのがね、簡単に言う友達をいっぱい作るってことなんだ」

間違っではない。宇宙^{ユニバース}へは最低でも二十二のかけがえない絆が必要だ。

学園都市に来て既に数カ月が経過したが、未だ出会えたアルカナは『塔』の一つのみ。だからこそ、今日の内に二つものアルカナと出会えたということは、今日から何かが動き出すような気がした。

「……オイオイ、まさかてめエ」

一方通行が悟ったような表情をするが、そこまで声を荒げるものだとは彼女には思えない。

ゆえに彼女は躊躇なく切り出した。

「というわけで、アナタも今日から私の友達ね。一方通行。ちなみに拒否は受け付けません。一応私はアナタに勝ったんだから、敗者の側としては一度くらい勝者の言葉を聞いてもいいと思うな。潔くね」

「ぐっ。……チッ。わアったよクソツタレが」

イエーイと彼女は内心快哉を上げる。オトモダチなんてくだらないと言いなようなキャラであった一方通行が認めてくれたことは幸いだった。もつとも認められなかったとしても付きまとう気は満々ではあったが。

「アルカナ。昼にも同じことを言っていましたね？ ミサカのことを二人目だとも。とミサカは確認をとります」

「そうだね。ミサカちゃんは二人目のお友達。一方通行は三人目のお友達だね。あつ、こう言うത്私が友達少ないみたいだけど、別にそんなんじゃないんだからね！勘違いしないでよね！」

「無駄なツンデレはどうでもいいです。とミサカはぼっそり切り捨てます。そうではなく一つ気になったのは、果たして一人目とは誰なのか、ということなのですが。とミサカは己の疑問を表に出します」

「あー」

彼女はそういうと視線をある方向に向ける。

「未だに全く進展がないんだよねえ。レベル6になるにはあの人の攻略がラスボスポジションになりそうな気がするくらいだし」

二人もつられて彼女の視線を追う。

遠く、しかし夜の闇にもボウッと浮かび上がる彼の住まい。

それは窓のないビルと呼ばれる建物だった。

「アレイスター……なんだよねえ。むしろ私がレベル6になるのを邪魔してるような気もするよ」

「……それはまあ……なんといえますか」

「あア？ アイツとオトモダチになれたア？ そいつアつまり」

「「不幸だよねえ（ですね）（だなア）」」

彼女の浮かべた乾いた笑みが、二人にはとても印象的だった。

04. とある少女と学園都市（後書き）

「なんとか四話で終わったね。よかったよかった」

「いろいろと無理矢理纏めた感がぬぐえませんが。とミサカは（ry」

「ま、それは言わないでってことで。ちなみにもう一個オマケがつくけどね」

「書いているうちに妄想がむくむくと来てしまったわけですね。とミサカ（ry」

「設定だけはあるんだけど、ってまんま打ち切りみたいな感じになっちゃうね」

「俺たちの戦いはこれからだ！ というアオリを残して終わるわけですね分かります。とミサ（ry」

「続くことはないだろうけどね。それとぶっちゃけ一方さん可哀そ過ぎない？ って感じで書き始めたネタだけど・・・」

「二万人の無表情軍用クローンが特攻してくるとか、ホラーですよ。とミ（ry」

「原作では完全な悪役として描かれてるけど、二万人が完全武装で殺しに行くからって言われて、殺すな傷つけるなお前最強なんだからなんとかしろよって無茶ぶりもいいところだよね」

「ミサカはそのために生かされてましたしね。むかつくからという理由でそげぶマンに超電磁砲ぶっ放すお姉さまと、反撃の結果殺戮という形を作ってしまったセロリ。どちらがマシなのか難しいところですよ。と（ry」

ハム子、9982号、セロリときて……やべえ、もうキャラがいねえ
……ア、アレイスターたんマジ天使！
……ないわぁ orz

オマケ・とある蛇足と脳内妄想（前書き）

BEGINNER・EASY・NORMAL・HARD・MANIACSの五つの難易度の内、三つ以上の難易度でプレイし、且つトゥルエンド意外のエンディングを迎えた場合のみ現れる隠しエピソード。そんな脳内妄想です。語り手はイゴールさん

オマケ・とある蛇足と脳内妄想

ふむ。残念でした、と言うべきなのでしょう。またしてもユニバースに到達できなかったようです。もしもお客人にとつて満足いく終わりだったのなら、このような物言いは避けるべきなのでしょう。

さてお客人。一応私は案内人のような役目も担っておりますれば、アドバースのようなものも可能なのですが、お聞きになれますかな？

そうですか。では、私の知る限り、手助けをさせていただきますよう。

さしあたっては絆の力、すなわちコミュニティに関しての助言をさせていただきますでしょうか。お知りになりたいアルカナを提示くださいませ。

……ほう。では、そのアルカナに関する助言を。

『死神』 第一位である一方通行様とのコミュニティですね。あの方は親しくなればなるほどご自身からお客人を遠ざけようとなさります。ゆえにあの方との絆を深めるためには根気が必要となりますよう。また、心の裡に踏み込まれることを嫌う方ですので、繋がりを強めようと話題を探すよりも、あえて何も言わずに傍に居るという選択の方が喜ばれるのではないでしょうか。そうですね。家族のような形を目指してみるのがよろしいかと。

『皇帝』 第二位である垣根帝督様とのコミニティですね。あの方は強い死の運命に魅入られております。ですので可及的速やかにお互いの距離を縮める必要があるかと。あの方との間にかげがえのない絆を築くには、あの方の未来を変えるほかありませんからね。あの方との繋がりが生まれた時点で、何よりもあの方を優先なさるつもりくらいで丁度よろしいかと。

『恋愛』 第三位である御坂美琴様とのコミニティですね。あの方はご自身の境遇ゆえ慕われることに慣れておられます。お客人は頼れる相手という立ち位置を目指されるのがよろしいでしょう。もっともそれ自体はそれほど難しい物ではありません。やはり注意を払うべきは、あの方の思い人とお客人が親しくなりすぎないことかと。泣きながら超電磁砲を乱射されるシーンなど、一度見れば十分でございましょう？

『女帝』 第四位である麦野沈利様とのコミニティですね。まず前提として意識しておくべきなのは、あの方とお客人が同年代というところでしょうな。暗部で育ったあの方にとって、同年代の友人というだけでお客人の優先順位は高いものとなります。とはいえ不用意に関係を強めてしまうと、あの方に手元に置いておきたいと思われ、アイテムの一員に巻き込まれることになりかねません。その道はユニバースには決して繋がっていないことを努々お忘れなきように。

『隠者』 第五位である心理掌握様とのコミニティですね。あの方とは接点を持つこと自体が非常に困難ですが、面識さえ出来てしまえば後はスムーズにいくかと。同等の優秀さを持ち年上でもあるお客人は、あの方にとって得難い存在でしょうからね。懐いてくる子犬にそうするように、優しく受け入れることが最上でしょう。接点の取り方、ですか？ 外堀から埋めていく形を採るべきでしょう

な。もつと言うならば、常盤台の学生は御坂様だけではないのですよ、とだけ。

『太陽』 第七位である削板軍覇様とのコミュニティですね。あの方は単純にして明快、と思われるかもしれませんが、非常に繊細な方です。お客人は女性……ぶっちゃけあの方の好みドストライクなわけで……オホン、失礼しました。このようなことは言うまでもなかったですね。何せお客人と出会った際にあの方顔を真っ赤にして走り去ってしまうのですから。そんなあの方と絆を作るには、搦め手で攻めてはどうでしょうか？ あの方の放っておけない状況、具体的にはスキルアウトに絡まれるか弱い女性を演じてみるなど、ベタながらも非常に効果的かと。

『愚者』 上条当麻様とのコミュニティですね。彼との絆を深めるには優れたバランス感覚が求められるでしょう。年上の落ち着いた女性が好きと言う上条様にとって、頭に齧りつくでもなければ出会いがしらに電撃を放つわけでもないお客人は、好意の対象とするに申し分ない存在となります。そうなれば上条様を中心に広がる勢力の女性とのコミュニティ構築は絶望的となってしまうでしょう。踏み込み過ぎず、好意を持たれていると勘違いさせず、しかしかけがえのない友人となるのは、お客人にとって一つの試練と言えるかもしれません。

『法王』 インデックス嬢とのコミュニティですね。あの方との絆の深め方をお客人が知りたがるとは意外でした。食事に誘えばそれだけで絆は強くなるといえますのに。とはいえ一つだけ鉄則が存在します。その鉄則とはバイキングに誘わないこと。店主側に頭を下げるお客人を見れば、あの方は迷惑をかけたのだと思い、以降食事に誘っても断るようになってしまいますので。しかしその鉄則さえ順守なさるのならば、かけがえのない絆を築くことは容易なことと

なるでしょう。

『魔術師』 ステイルⅡマグヌス様とのコミュニティですね。『法王』のコミュニティをある程度強めると襲撃してきますが、決してお怒りになれませんように。間違っても撃破などしないで頂きたい。お客人ならあの方を圧倒出来てしまいますので、不安なですよ。そしてもう一つ。あの方には己の命を懸けてまで守りたいと思う人がおります。お客人が友人としての接し方を逸脱すれば、あの方はおそらく姿を隠そうとしてしまうでしょう。お客人が本気なのであればあの方を追うことを止める事など出来ませんが、その先にもまたユニバースへの道は残されてはおりませんよ。

『女教皇』 神裂火織様とのコミュニティですね。あの方との絆の築き方は『女帝』のそれとほぼ同じとなります。お客人と同世代であることをお忘れなきように。お客人が年齢について言及すれば、下手をすれば飛んできますので。斬撃が。逆に初めから同世代の友人として付き合えば、あの方にとってお客人は何に代えても守るべき友と相成りましょう。

『刑死者』 土御門元春様とのコミュニティですね。様々な顔を持つあの方は、ペルソナという心の仮面を付け替えるお客人とある意味似ているのかもしれませんが。また、あの方とのコミュニティを育てることに於いて他の方への影響というものはほとんどありません。ゆえ、気兼ねない付き合いが出来る事でしょう。助言役としても優秀でございますね。とはいえあの方を頼りすぎて他の方のお付き合いを疎かにすれば、それは本末転倒にございますのでご注意を。

『節制』 エツアリ様とのコミュニティですね。『恋愛』のコミュニティをある程度育むとあの方の側から来てくださるでしょう。『恋愛』のコミュニティを強め御坂美琴様の情報を得るほどにあの方

とのコミュニティも強まっていくという、一風変わった付き合い方となるでしょう。とはいえかけがえのない絆に至るには、一つ、あの方の背負うものとの対峙が待ち受けてはございますが。お客んならば乗り越えられることを信じていますよ。

『星』 結標淡希様とのコミュニティですね。ある事件に介入することで面識を持つことが可能です。他の方の印象が下がると懸念されるかもしれませんが、勇気を持って踏み込んでいただきたい。あの方は過去のしがらみを始め、様々なものに囚われております。それをゆつくりと解きほぐしていけば、自ずとあの方本来の表情を目にすることが出来るはずです。焦りや性急さ、結果のみを求める言葉などはくれぐれも謹んでいただくべきかと。

『正義』 白井黒子様とのコミュニティですね。あの方も『恋愛』のコミュニティからの面識を作ることになりましょう。既にご理解いただけているかとは存じますが、『恋愛』のコミュニティは様々なコミュニティに繋がっております。それゆえ『恋愛』のコミュニティを傷つける可能性のある『愚者』のコミュニティには慎重に取り組む必要があることもご理解いただけることでしょう。とはいえ他のコミュニティからの間接的な妨害さえなければ、あの方との絆を深めることは容易かと存じます。

『運命』 滝壺理后様とのコミュニティですね。『女帝』のコミュニティを育むことで得ることが出来る絆ですな。体晶の毒に蝕まれたあの方を見れば、お優しいお客人のこと、おそらく力になろうとなさるのでしょう。それ自体はお止めいたしません。しかし大切なのは根幹を崩すこと。あの方が薬など使わずに済む世界を作り上げる事を目指すべきでしょう。そのためには様々なコミュニティの力が必要になることをお忘れなきように。あの方との絆を得ることを、一つの到達点と認識されてもよろしいのではないのでしょうか。

『剛毅』 絹旗最愛様とのコミュニティですね。『女帝』のコミュニティから面識を持つことが出来る事でしょう。もっとも不用意にあの方と友人になれたのだと思うことはお控えくださいませ。あの方は過去にある実験において『死神』のコミュニティを担う一方通行様に……ある意味被害者のような形で関わってしまっています。『死神』のコミュニティをお客人が育む意思を持つ以上、隠しごとなしにすべてを信頼し合う絆というのは極めて困難です。とはいえかけがえのない絆を得るためには、いつかあの方の過去とも向き合う必要はあるのでしょうか。

『悪魔』 フレンダールセイヴェルン様とのコミュニティですね。死の運命に強く惹きつけられている方でありませう。あの方ともコミュニティを得るには『女帝』のコミュニティのみならず、『皇帝』のコミュニティが必要となりませう。どうか選択をお間違えなきように。『女帝』の意思、『皇帝』の決意、どちらに依るでもなく、お客人の思いを貫いてくださいますように。

『月』 浜面仕上様とのコミュニティですね。『女帝』のコミュニティから手に入れられるコミュニティの最後のお一方ですね。あの方も『愚者』を担う上条当麻様と同様、他の方への強い影響力を持つております。下役のような扱いをなされるあの方ですが、お客人がやさしくし過ぎてしまえば他のコミュニティへの影響が強くなってしまいます。ある方との間を取り持ったための付き合い、と、それくらいの認識で行動なさるのが最適なのではないでしょうか。

『塔』 アレイスタークロウリー様とのコミュニティですね。もっとも困難とされるコミュニティの一つとなるでしょう。しかし付き合い方さえ知ってしまえば中々に話の出来る方だと理解できるはずです。あの方から招かれるようになるまでは地道な努力が必要と

なります。コミュニティに関係しないある方を窓口に、間接的な接触を続けていくのが肝要ですな。とはいえこれだけでは助言とは言えません。ではヒントをひとつだけ。カエルという単語をご記憶くださいますように。

『永劫』 風斬氷華様とのコミュニティですね。AIM拡散力場に干渉できるお客人数ならば、あの方との接触は困難なく行えることでしょう。あの方もAIM拡散力場の作りだした存在。とはいえお客人のペルソナと同一視してはなりませんあの方には意思があり、心がありますれば。しかしそのことさえ忘れることが無ければ、ご友人を求めるあの方との絆は、すぐさま築くことが出来るはずです。

『審判』 おやおや、お客人は未だ誰との絆が『審判』のコミュニティを育むのかご存じでないご様子。ならば私どもからお教えすることはありますまい。

『戦車』 ミサカ9982号様とのコミュニティですが、私程度の助言をお聞きになりたいとは。まったくお客人もご冗談を仰られるのですな。あの方との絆はこれまでのお客人の道程のすべてで築くことが出来ていましょう。それとも無二の親友以上のなにかになりたいとでも仰られるつもりですか？ もしそうであるならば、なおさら私程度の知恵など頼りになさるのはお止めになるべきでしょう。お客人が真にあの方と向き合い、心からあの方を思っていてこそ、お客人の求める何かを手に入れられるのではないですか？

さて、お聞きになられたいことはこれで以上でございましょう。

では再びの生をお楽しみくださいませ。

お客人の道の果てにあるユニバース。それにお客人が到達できる日を心待ちにしております。

かつてお客人が得た神にも等しき力、ユニバース。

それさえあれば『この世界』を変革することも、『元の世界』と行き来することも、そして『新たな世界』を作り出すことすらも可能となります。

あまり待たせすぎではありませんよ？ 『彼』もお客人の帰還を心待ちにしております。

オマケ・とある蛇足と脳内妄想（後書き）

というわけで完結です。

にしても禁書はキャラが多いですな。ペルソナも多いと思ってましたが、アルカナが足りなくなるとは。

三人の主人公はいるというのに打ち止めは入ってないし。姫神や吹寄も好きなんだけどなあ。初春や佐天さんも入れたかったし。小萌先生や黄泉川も入れたかったのに。アニエーゼ部隊とか右席メンバーとかも入れたら面白そうなんだけど。あとやっぱ木原くんとか。アルカナ足りなすぎ！

とまあどうせ続かないしと好き勝手書いてはおりますが、楽しんでいただけたのでしょうか？

他の連載の方が詰まったので気分転換がてらシリアスの練習でも思っ書き始めた本作ですが、続きを読みたいと思わせることが出来ているのかな？

感想待ってるにゃー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3453t/>

とある科学と仮面奏者

2011年5月29日18時31分発行